

【高等学校部門 優秀賞】

小さな神様

樟蔭高等学校 1年 奥垣 知那美

私たちの身の回りには、小さくて大切な神様がいる。それはお米だ。神様と言っても、あの小さな一粒一粒に神様がいるのだ。

私達は、ご飯を食べるときには、必ず「いただきます」「ごちそうさま」と言っているが、祖母はそれだけでは感謝の気持ちや美味しかった気持ちは伝わらないと言う。

それは、母の実家がお米を作っているからである。祖父や親戚も集まって手間暇かけて作ったお米を、大切に頂かなければならないという意味だろう。

その気持ちを伝えるには、好き嫌いや、食べ残しをせず、お皿やお茶碗をきれいにすることだと言っていた。

そのため祖母は「ご飯粒は残したらあかんで、お米の一粒一粒には神様がいるんやで。」と私が小さい頃から言っていたのだ。

母も祖母から毎日のように言われてきたそうで、祖母から母、母から私へと受け継がれてきた言葉だ。

お米を残さず食べることは、あたりまえ、常識だと思う。

毎日、お米を残さないように心がけていたおかげで、私は高校生になった今でも、外食の時だって、一粒もご飯を残したことがない。私が胸を張って自慢できることだ。

しかし、祖父も高齢になり、家族総出で作っているお米も、いつかは途絶えてしまうかもしれない。

しかも、あの言葉を使う祖母はもうこの世にはいない。私の弟は、小さい頃に祖母が亡くなったため、祖母の口からあの言葉を聞いたことがない。弟にもこの言葉を受け継いでもらうため、次は私が天国の祖母からのメッセージを弟に伝えていく番だ。祖母から受け継いできたこの言葉、お米作り、田んぼ、そしてなんといってもお米は、次世代にまで残していきたい我が家の宝だ。

白いご飯が私の元気の源なのだ。